

オセアニア[NZ]



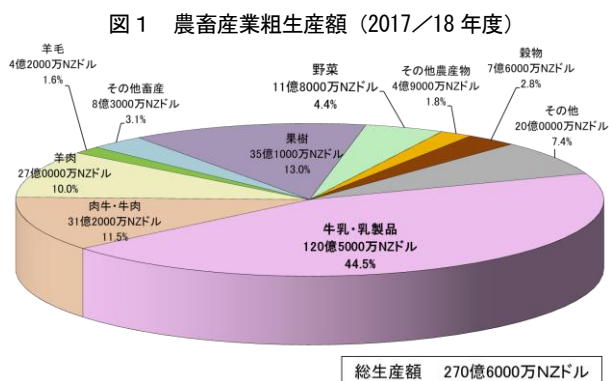
1 農・畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、温暖な気候と豊かな土壌に恵まれ、国土面積（2680万ヘクタール）のうち、4割強に当たる1390万ヘクタールが農地となっている農業立国である。

また、人口が約490万人と国内の市場規模が小さいため、農畜産業は貿易に依存した構造となっており、農畜産物の輸出額（FOB）は全体の約6割を占め、外貨獲得上、重要な地位にある。

畜産部門は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額ともに約7割を占めている。特に牛乳・乳製品は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額ともに4割以上を占めており、基幹部門である。

2017/18年度（4月～翌3月）の農畜産業粗生産額は、270億6000万NZドル（前年度比8.2%増）となった（図1）。

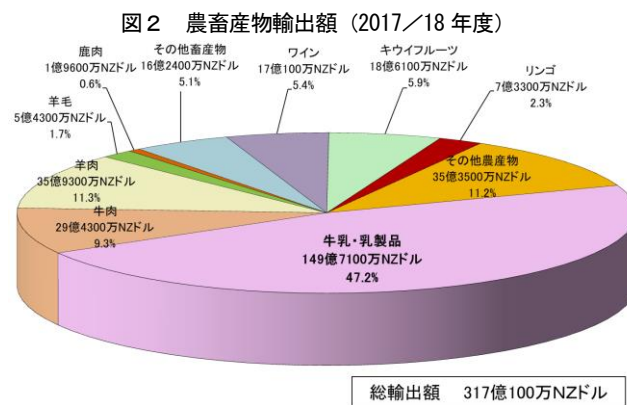


資料：NZ一次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」
注1：年度は4月～翌3月。
2：林業および水産業を除く。

基幹部門である牛乳・乳製品は、バター、全粉乳を中心に乳製品の国際価格が好調に推移したことから、粗生産額を押し上げ、前年度と比較するとかなりの程度増加（120億5000万NZドル、同9.6%増）となった。肉牛・牛肉は、飼養頭数の増加や価格が高水準であったことから、31億2000万NZドル（同

6.6%増）とかなり増加した。また、羊肉は27億NZドル（同22.4%増）と増加する一方、羊毛は4億2000万NZドル（同10.6%減）と減少した。農産物（野菜、果樹、穀物およびその他農産物）部門は、野菜部門が好調で、59億4000万NZドル（同3.6%増）と順調な伸びとなった。

一方、2017/18年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額（FOB）は、317億100万NZドル（前年度比10.6%増）とかなりの程度増加した（図2）。



資料：Beef + Lamb NZ「Farm Facts」
注1：年度は7月～翌6月。
2：林業および水産業を除く。

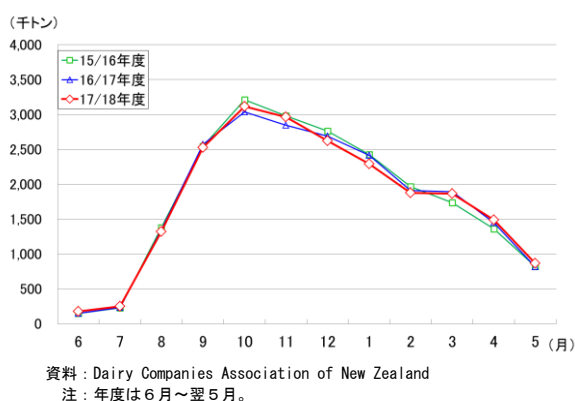
品目別に見ると、牛乳・乳製品は、バター、全粉乳の国際価格が高値で推移したことなどから、前年度比でかなり大きく増加（149億7100万NZドル、同12.1%増）した。牛肉は、生産量の増加と価格が引き続き高水準であることから、増加（29億4300万NZドル、同8.8%増）となった。また、羊肉（ラム・マトン）は35億9300万NZドル（同25.7%増）、羊毛は5億4300万NZドル（同4.0%増）と、ともに増加した。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる8月に搾乳を開始し、10月から初夏となる12月に生乳生産のピークを迎え、その後、次第に減少して、翌年6～7月にはほとんどの搾乳牛が乾乳し分娩に備えるという、明確な季節型の生産体系となっている（図3）。そのため、生乳生産の中心となる9月～翌2月の6カ月間に、年間生産量の約4分の3を生産する。

図3 生乳生産量の推移



NZの生乳生産コストは、放牧中心の飼養形態により、世界的に見ても最も低い水準にある。生産量の95%が輸出に仕向けられる牛乳・乳製品は、NZの総輸出額の約3割を占めており、酪農・乳業部門は、NZの基幹産業の一つとして位置付けられている。

NZは、生乳生産量では全世界の約3%にすぎないが、世界最大の乳製品輸出国である。特に全粉乳の国際市場でのシェアは約6割を占める。国内市場の規模が小さいため、生産者乳価や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい構造となっている。

① 主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。ニュージーランド・デイリーボード（NZDB）が、2001年9月まで、乳製品の一元輸出機能を持っていたが、酪農産業の再編が行われ、同年10月、2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協（乳業メーカー）フォンテラが誕生した。

フォンテラの誕生と同時に2001年、生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法（Dairy Industry Restructuring Act 2001）が成立した。同法には、フォンテラの独占による弊害を回避するため、乳業メーカーの新規参入機会の付与が盛り込まれており、フォンテラは、集乳した生乳の一定量を、他社の求めに応じて供給することが義務付けられている。NZにおけるフォンテラの集乳シェアは、依然として8割以上を占めているものの、近年は徐々に低下しており、この義務付けの見直しに向けた議論が進められている。

② 生乳の生産動向

搾乳牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加、さらに、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換などを受け、増加傾向で推移してきた。しかし、乳製品国際価格の低迷に伴い淘汰が進んだことで、2015/16年度から2年連続で減少となった。2017/18年度は、乳製品国際価格の回復等を反映して増加となった（図4）。

NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域を中心に行われてきた。しかし、近年では、酪農経営の収益性が良好なため南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されたことから、特に南島での頭数拡大が著しかった。2017年12月時点の搾乳牛飼養頭数は、先述の通り、499万3000頭（前年比2.7%増）と3年ぶりに増加となった。従来からの主産地である北島は295万2000頭（同1.9%

増)、新興酪農産地である南島は204万1000頭(同3.8%増)と、両島とも増加となった(表1)。

表1 地域別の飼養戸数・頭数・規模の推移

地域・区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18	
北島	飼養頭数(千頭)	2,990	3,021	2,986	2,896	2,952
	飼養戸数(戸)	8,859	8,818	8,696	8,529	8,377
	1戸当たり飼養頭数(頭)	338	343	343	340	352
南島	飼養頭数(千頭)	1,933	1,997	2,012	1,965	2,041
	飼養戸数(戸)	3,068	3,152	3,222	3,219	3,213
	1戸当たり飼養頭数(頭)	630	634	624	611	635
合計	飼養頭数(千頭)	4,923	5,018	4,998	4,861	4,993
	飼養戸数(戸)	11,927	11,970	11,918	11,748	11,590
	1戸当たり飼養頭数(頭)	413	419	419	414	431

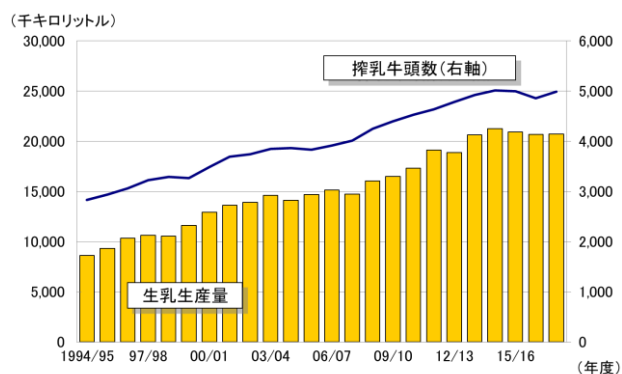
資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注1：各年12月末時点。

注2：搾乳牛の頭数および戸数。

生乳生産量は、これまで搾乳牛頭数の増加に加えて、補助飼料の給与増加による1頭当たり乳量の増加もあり、右肩上がりでも推移してきた(図4)。しかし、乳製品国際価格の低迷を受け、生産者価格が引き下げられ生産意欲が減退し搾乳牛頭数が減少したことから、2015/16年度から2年連続で前年度を下回った。2017/18年度の生乳生産量は、搾乳牛頭数が回復基調になったものの、1頭当たり乳量が減少したことから、2072万4000キロリットル(同0.1%増)と前年度並みとなった。

図4 生乳生産量と搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

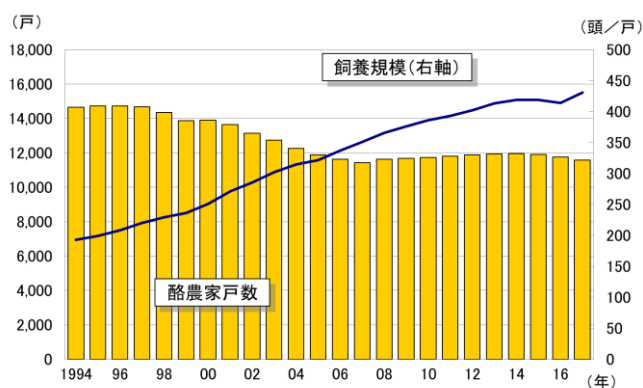
注1：年度は6月～翌5月。

注2：搾乳牛飼養頭数は12月末時点。

酪農家戸数は、2007年に乳製品国際価格が高騰して以降、2014年(1万1970戸)にかけて7年連続で前年を上回ってきたが、2015年以降、乳価の低迷等を反映し減少傾向に転じ、2017年は、1万1590戸(同1.3%減)と、3年連続で減少した。

1戸当たり搾乳牛飼養頭数は、農家の規模拡大に伴いこれまで一貫して増加してきた。2016年はこういった長期的な傾向に反して減少したものの、2017年は、431頭(同4.1%増)と前年を上回った(図5)。なお、1000頭以上を飼養する経営の全体に占める割合は、4.7%となっている。

図5 酪農家戸数と飼養規模の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」

注：各年12月末時点。

③ 牛乳乳製品の需給動向

NZでは、最大手の乳業メーカーであるフォンテラが、8割以上の乳製品生産シェアを占める。

輸出相手国は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界140カ国に及んでいる。フォンテラは、2002年に世界的な大手食品メーカー「ネスレ」と合併企業を設立し、2003年1月から、中南米の市場での乳製品製造・販売を手がけている。2007年には、中国に牧場を建設し生乳生産を開始するなど、国際市場への積極的な進出を図っている。

2017/18年度（7月～翌6月）の主な乳製品の輸出量のうち、全粉乳は、主要な輸出先である中国からの引き合いが引き続き強いことから、136万6000トン（前年度比0.9%増）と前年度をわずかに上回った。一方、脱脂粉乳については、欧州で過剰在庫を抱え国際需給が緩和基調で推移したことから、NZからの輸出量は39万4000トン（同5.0%減）と減少した。バターについては、国際価格の高値が継続し、輸出先国での引き合いが弱まったため、45万2000トン（同5.5%減）と減少した。また、世界的に需要の伸びが好調なチーズについては、全粉乳に生産がシフトしたことから、33万トン（同6.3%減）と減少した。（表2）。

表2 生乳生産量および乳製品輸出量の推移

（単位：千頭、千キロリットル、千トン）

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18	
経産牛飼養頭数	4,923	5,018	4,998	4,861	4,993	
生乳生産量	20,657	21,253	20,914	20,702	20,724	
輸出量	バター	495	481	505	476	452
	チーズ	266	303	340	352	330
	全粉乳	1,407	1,364	1,357	1,354	1,366
	脱脂粉乳	360	419	428	415	394

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注1：経産牛飼養頭数は12月末時点、単位は千頭。

注2：生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。

注3：乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

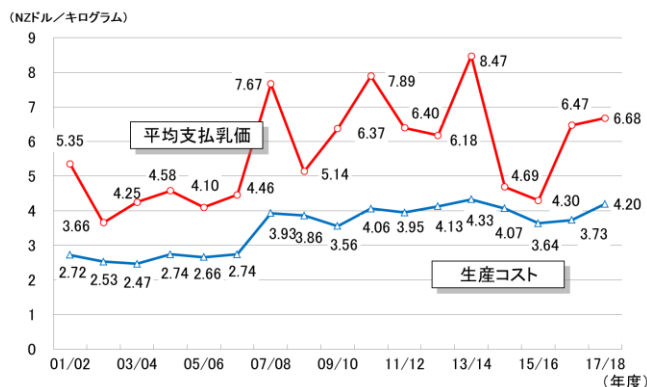
④ 乳価の動向

生産者乳価は、乳製品の輸出が主体であることから、国際相場や為替相場（NZドル）の動向などに左右される。

2017/18年度（6月～翌5月）の生産者乳価は、中国からの強い需要を背景として全粉乳価格が高水準であったことから、6.68NZドル（前年度比3.2%高）と、大幅に上昇した2016/17年度に続き上昇した（図6）。

生産コストは、2000年代後半に入ってから、乳価の上昇を受け、放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農においても、補助飼料として濃厚飼料の給与が増加したことにより、微増傾向で推移してきた。しかし、2014/15年度および2015/16年度は、乳価低迷により、酪農家が補助飼料の給与やかんがい施設への投資などを抑制したことから低下した。2017/18年度は、乳製品国際需給の改善を背景として、酪農家の増産意欲が回復し、飼料費、施設修繕・維持費、賃金等が上昇し、同4.20NZドル（同12.6%増）と2年連続で増加した。

図6 生産コストと生産者乳価の推移（乳固形分ベース）



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、 「Economic Survey」

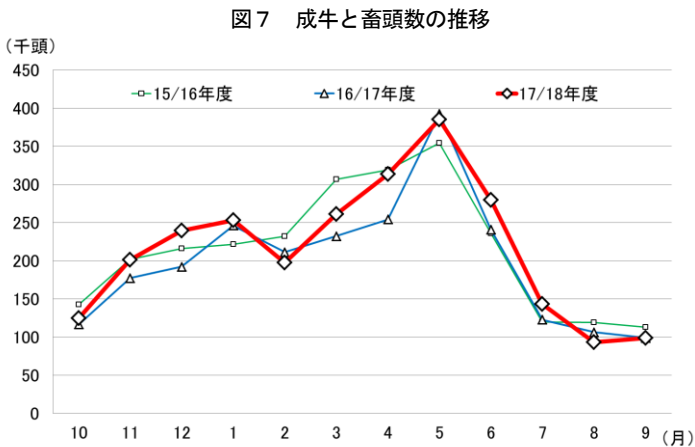
注：年度は6月～翌5月。

（2）肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、草地に依存した生産体系となっており、フィードロットでの穀物肥育による生産は、ごくわずかである。

牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることは、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、肉用牛のと畜頭数は牧草の生育が良好な春（9～11月）から夏（12月～翌2月）にかけて増加し、冬（6～9月）に減少する。一方、と畜頭数全体の4割程度を占める経産牛は、大部分が乳用経産牛であり、乾乳期に集中して淘汰が増加することから、5月にピークを迎える（図7）。



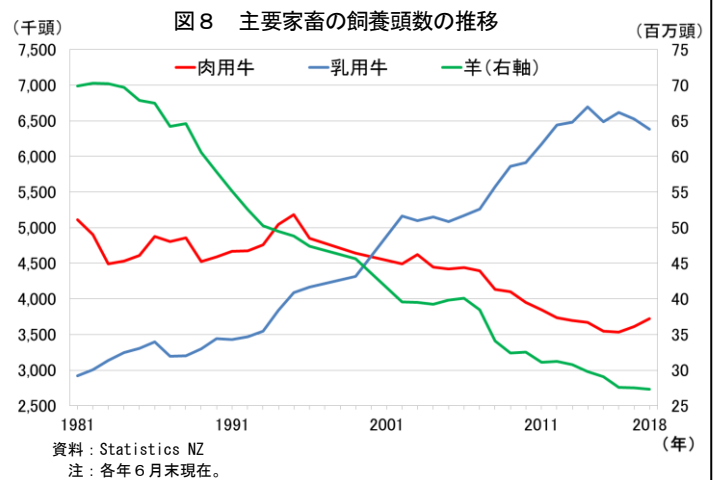
資料：Statistics NZ
注：年度は10月～翌9月。

また、肉用牛として飼養される牛の約2割は、乳用種または交雑種（乳用種×肉用種）となっている。酪農部門から供給される乳用種のうち、経産牛は肥育されずに加工用牛肉（挽き材用）として、NZ最大の輸出市場である米国を中心に輸出されている。雄子牛は、一部は肥育されているものの、多くが生後4日程度でと畜され、主にベビーフードやペットフード向けに仕向けられる。

NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから、酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉のうち、枝肉重量ベースで8割程度が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受けている。

① 牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業などの、より収益性の高い部門への転換などにより、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりに増加している乳用牛と逆転した。特に2007年以降は、乳製品の国際価格が好調に推移したことから、肉用牛・羊から酪農への転換が一層進んでおり、乳用牛の増加と、肉用牛の減少の傾向が強まっている（図8）。



肉用牛飼養頭数は、長期的には減少傾向にあるが、2018年6月末時点では、牛肉輸出価格が比較的好調であったことや、酪農の収益性が悪化したことなどの影響を受け、372万1000頭（前年比2.9%増）と2006年以来、11年ぶりに増加に転じた。2017年に引き続き、2年連続で増加した（表3）。

表3 牛飼養頭数の推移

(単位：千頭)

区分／年	2014	2015	2016	2017	2018
肉用牛	3,670	3,547	3,533	3,616	3,721
うち繁殖雌牛	1,012	982	954	976	1,029

資料：Statistics NZ
注：各年6月末時点。

② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少が続いており、2010/11年度から2013/14年度までは、60万トンを超える水準で推移した。

2014/15年度は、北島の干ばつや米国向け輸出需要の高まりから、乳用牛淘汰が進展したことなどを受け、と畜頭数、牛肉生産量はともに増加した。しかし、2015/16年度は、米国向け需要や乳用牛の淘汰が一段落したことから、成牛と畜頭数は258万5000頭（前年度比5.0%減）、牛肉生産量は63万3000トン（同4.2%減）とともに減少した。

2016/17年度は、酪農の経営環境が改善し、乳用牛の保留が進んだことなどから、成牛と畜頭数は239万3000頭（同7.1%減）、牛肉生産量は60万5000トン（同4.1%減）と減少となった。2017/18年度は、比較的高水準な肉牛取引価格と、2017年後半に発生した干ばつにより牧草の生育が悪かったことから、淘汰が増加したものとみられ牛と畜頭数は、259万2000頭（同7.8%増）、牛肉生産量は、65万1000トン（同7.1%増）とかなりの程度増加した（表4）。

イ 輸出動向

2017/18年度の牛肉輸出量は、43万1000トン（同8.9%増）と、増加した（表4）。

輸出先国別にみると、最大の輸出先国である米国向けは、同国における牛肉生産量の増加に伴い年度後半は需要の減少がみられたものの、年度前半の輸出が好調であったことから、19万2600トン（同4.6%増）と増加した。2番目の輸出先国である中国向けは、同国における牛肉需要増に伴い10万5164トン（同34.2%増）と大幅に増加した。なお、同国向けの冷蔵牛肉輸出は、同国向け輸出量全体に占める割合は少ないものの、試験的輸出が開始された2016/17年度は121トン、2017/18年度は2613ト

ンと大幅に増加し、冷蔵牛肉輸出全体では、日本、アラブ首長国連邦に次ぐ、3番目の輸出先国となった。

表4 牛肉需給の推移

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
成牛と畜頭数(千頭)	2,403	2,722	2,585	2,393	2,592
子牛と畜頭数(千頭)	2,129	2,120	1,995	1,764	1,829
牛肉生産量(千トン)	599	661	633	605	651
子牛肉生産量(千トン)	34	34	31	28	30
牛肉輸出量(千トン)	391	432	424	396	431

資料：Statistics NZ、Beef + Lamb NZ「Annual Report」

注1：年度は10月～翌9月。

2：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

③ 肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉のうち8割程度（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況や、主要決済通貨である米ドルや英国ポンド、ユーロに対するNZドルの為替相場、そして最大の輸出市場である米国国内における牛肉の生産や価格の動向に左右される傾向がある。輸出用肉用牛の生産者手取価格は、米国や中国からの堅調な需要により、2010/11年度以降、比較的高い水準を維持している。2017/18年度は、1頭当たり1245NZドル（前年度比0.6%減）と、前年度をわずかに下回った（表5）。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

（単位：NZドル/頭）

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
生産者手取価格	909	1,144	1,181	1,252	1,245

資料：Beef + Lamb NZ「Farm Facts」

注1：年度は10月～翌9月。

2：皮革を含む。